

あ と が き

昭和五十六年正月に『類字名所和歌集 本文篇』を刊行してから七年が経った。その「あとがき」に記したように、数年後には、「索引篇」に初句・四句・歌枕索引を収め、「研究篇」に『類字名所和歌集』に関する考察と編者里村昌琢の年譜や連歌作品等とを収めた「索引・研究篇」の公刊を考えていた。しかし、年譜の作成には、昌琢の作品や関連資料の調査・検討はもとより遺墨の蒐集等、まだまだ相当の時間を要するので、当初の考えを変更して索引と研究とを分ち、先ずは「索引篇」を刊行することにした。その後数年間は体調を崩したこともあって、本務の遂行が精一杯で索引を纏める余裕はなかった。しかし、時折自らが「索引篇」の必要性を痛感するにつけ、本文提供者として、やはり索引を纏めなければならないと考えてきた。

共編者の谷地快一は研究分野との関わりで、早くから『類字名所和歌集』を高く評価し、昌琢にも関心を持っていたので本文の提供を喜び、索引の刊行を慫慂してくれた一人である。時折顔を合わせた際には索引のことも話題になったが、その都度消極的な返答を繰り返して五年が過ぎた。昭和六十一年の暮、「索引作りを手伝うから纏めませんか」との申し出を受けた。躊躇はしたもの、その言葉に勇気づけられて「索引篇」を纏める気持ちになった。内容的には前記の三つの索引に、白石悌三氏が昭和四十七・八年に公刊された『国歌大観番号による類字名所和歌集索引』を収録することでも意見が一致した。

昨年六月上浣、福岡に白石氏を訪ねて「索引篇」刊行の趣意を説明申しあげた。さらに、ご高編の索引借用及び体裁の改編を具申し、ご意向をお伺いしたところ、有難くもご快諾を賜ることができた。本書には「地名索引」として収録させて戴いた。その凡例にも記したように、ご高編の増補を旨指すとともに、「本文篇」と全く同様の歌番号を施して検索の便に供し、勅撰二十一代集名・部立をも整備して『国歌大観』及び『新編国歌大観』の両書で

検索し得るようにも配慮した。また、可能な限り底本の誤りや不十分な点の補訂に努めた。が、果して白石氏の意向とご期待とに多少なりとも添え得るものになったのであろうか、案ずることしきりではある。

本書の初句及び四句索引は谷地が、歌枕及び地名索引は千艘（旧姓村田）が、各々その草稿を作成し、相互に点検をし、疑問点を解決するという共同作業を行った。入念な作業を心掛けたが、初歩的な間違いや不注意による誤り等が存するかとも思う。諸先学のご叱正ご教示を賜れば仕合せである。

また、本書を編むに際し、初句及び四句索引の草稿作成・カード整理において、東洋大学国文学科三年の岩佐恵美子・井波久美子、東洋大学短期大学日本文学科（当時二年）の木村由里子・三瓶美奈子・田村宏美・茂木幸子の諸嬢の協力を得た。記して厚く御礼申し上げたい。

なお、「本文篇」の本文に翻字上の錯誤や誤植を発見した。正に汗顔のいたりであり、非才と不注意とを羞じている。ここに深謝して訂正する次第である。その正誤表を索引本文の奥に附載したので、恐縮ではあるが本文をご訂正くださるよう御願い申し上げる。

最後に、「本文篇」に引き続き、本書の刊行をお引き受けくださった笠間書院社主池田つや子氏、並びに刊行上種々お世話になった社員各氏に対して、衷心より深甚なる謝意を表する。

昭和六十三年八月八日

千 艘 秋 男